

06

宮城県
石巻市

一般社団法人イシノマキ・ファーム

障がいの有無に関係なく一緒に働く場を作る

石巻・北上地区で、震災後荒れていた農地が緑鮮やかなホップ畑に生まれ変わった。一般社団法人イシノマキ・ファームは、障がいや心身の不調の有無にかかわらず、さまざまな人が一緒に働く「ソーシャルファーム」の仕組みで、社会的に弱い立場の人たちの雇用を生み出そうと奮闘する。

取組のPOINT

ヒト

障がい者・引きこもりの心の支え

着眼点

ソーシャルファームを作る

連携・協働

「農」を軸に連携

持続性

事業多角化進め安定雇用

DATA

取組主体

一般社団法人
イシノマキ・ファーム

取組内容

障がい者・引きこもりの
就労支援

人物紹介

代表理事
高橋 由佳 (たかはし ゆか)



仙台市出身。ジョブコーチとしての職歴を活かし2011年に若者の就労支援を行うNPO法人Switch創設。2013年にユースサポートカレッジ石巻NOTEを立ち上げ、不登校・引きこもりを含めた若者支援をスタート。2016年一般社団法人イシノマキ・ファームを設立し代表理事に就く。

ヒト

障がい者・引きこもりの心の支え

「他の人と同じように働きたい」

高橋由佳さんは2004年頃から、宮城県障害者職業センターでジョブコーチとして働いていた。障がい者が企業に適応し働き続けるために、障がい者本人と企業側の両方にサポートを行う仕事だ。精神障がい者があるとき発した「他の人と同じように働きたい」という一言がずっと忘れられなかったという。障がい者向けに特別に用意された仕事ではなく、社会の中で必要とされて働き、給料をもらって納税し、家庭を持つ……現状では精神障がいを持つ人にそれが難しい。変わらなければならないのは、受け入れる社会のほうではないか。ジョブコーチとして関わった企業や何人かの障がい者のサポートはできても、それ以外の人の意識は変えられない。もっと広く伝えたい。そう考えた高橋さんは、2011年3月、障がい者の若者の就労支援を行うNPO法人Switch（スイッチ）を仙台で設立。法人登記は東日本大震災の数日前だったという。

若者の就学・就労支援

宮城県全体の震災被害の大きさを目の当たりにし、高橋さんは法人の活動を一旦断念した。すぐに南三陸や石巻、東松島などの被災地に入り、精神保健福祉士の資格を活かして心のケアにかかわるボランティアに明け暮れた。そこで気づいたのは、仕事や学校といった「居場所」が、被災者のつぶされそうな心を支えているということ。「所属する場所って大事だ、と思ったんです。それなら私はSwitchをやらなければ！」と。同年6月、仙台へ戻り同法人の活動を再スタートさせた。

一方で震災後、被災地の不登校児童・生徒の増加が問題になっていた。宮城県の不登校出現率が全国ワーストを記録、中でも石巻市が最も高いとされた。自分たちの支援対象である若者がつらい思いを抱えている現状にショックを受けた高橋さんは、2013年、法人の事業として「ユースサポートカレッジ石巻NOTE」を設立。高校生から10代、20代の引きこもり等の若者を対象に個別相談、就学就労等のサポートを始めた。これが、イシノマキ・ファームが生まれるきっかけとなった。



「石巻市農業担い手センター」で就農希望者の相談対応

着眼点 ソーシャルファームを作る

農は人をリカバリーする

石巻NOTEでは就労や就学を目指すさまざまなプログラムを実施し、10～20代の若者が通っていた。発達障がいや引きこもりの人も多くいた。あるとき、高橋さんの活動を知った近所の人々が「うちの農地で農作業してみないか」と声を掛けた。引きこもりの人が屋外で土に触れ、太陽の光を浴びれば、心も晴れやかになるのでは、という提案だった。「続くかどうか……」という心配は無用だった。農園にいるときはみんな驚くほど表情が明るく、笑い声が飛び交う。企業実習は休む子でも、農園の日は必ず来た。仮設住宅の高齢者も誘うと「久しぶりだ」と喜びながら慣れた手つきで鋤をふるい、初心者若者にあれこれと教えてくれた。NOTEの利用者と、仮設のおじいちゃん・おばあちゃん、みんなが農業をしながら元気になっていった。「農には人をリカバリーする力がある」。高橋さんは確信した。

障がいがあってもなくても一緒に働く

精神障がい者の「他の人と同じように働きたい」という言葉がずっと心に刺さったままだった高橋さんは、石巻NOTEの経験から「農業ならそれが叶えられるのでは」と考えた。そこで2016年、一般社団法人イシノマキ・ファームを設立し、「中間的就労」の制度に沿って農業に特化した就労支援をスタート。週に1～2回、心身の不調などを抱える若者が農業に従事し日当を得る仕組みを作った。農地は、被災後使われなくなった土地を借りた。地域内の交流を深めるにつれ、地元の高齢者らが自然に畑仕事を教えてくれるようになった。古民家をリノベーションし、宿泊施設として一般の就農希望者も受け入れた。こうして高橋さんは、障がいや心身の不調の有無にかかわらずさまざまな人が共に働く「ソーシャルファーム」を作っていた。

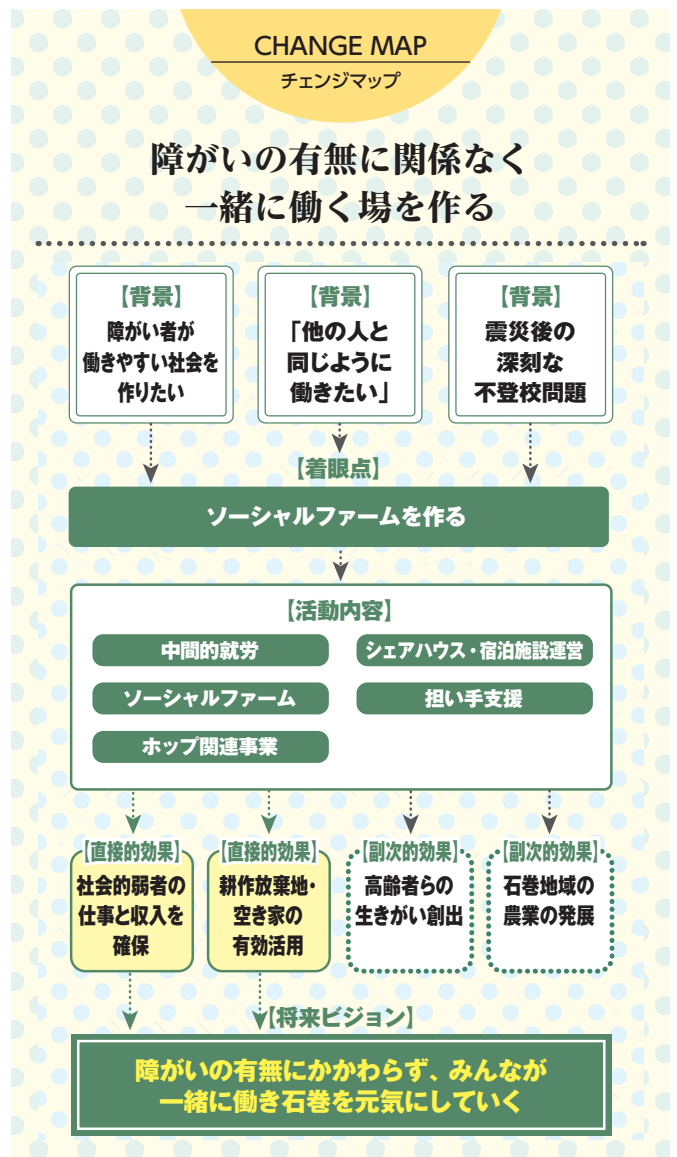
ユニークなのは、主にホップを栽培する点だ。苦みや香りのもととなるビールの主原料で、将来醸造まで手掛けられれば収益を見込めると考えた。高さ5mにも伸びるグリーンカーテンは、疲弊した被災地の風景を明るく彩ることができるし、手摘みの楽しさは観光客を呼び込めるだろう。福祉制度を活用せず自立して運営するために、どうにか収益事業を確立しようと奮闘した。

連携・協働 「農」を軸に連携

行政の委託で就農サポート

イシノマキ・ファームの事業の柱は前述の「ソーシャルファーム」で、他に「農業担い手支援」「ホップ栽培と関連事業」があり、それぞれ多様な団体・組織と連携する。

2018年、石巻市の委託事業で「石巻市農業担い手センター」を開所し、本格的に就農希望者のサポートを始めた。新規就農のための情報発信や農業体験会の開催、農家や農業法人を

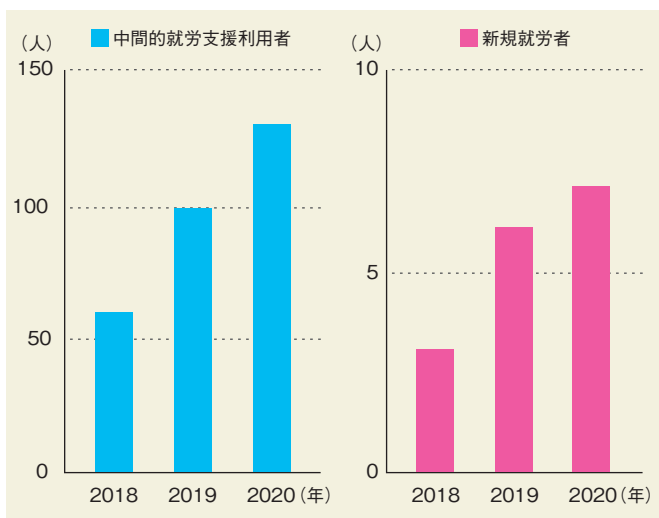




中間的就労支援 じゃがいも畑での作業の様子

回って研修先・受け入れ先を開拓し、希望者とマッチングも行う。単に就農支援だけでなく、移住や就農後も不安解消などを含めた伴走型支援をできることが特長だ。これまでに16人の就農を実現させ、現在、イシノマキ・ファームにも2人の研修生がいる。就農といっても、最初から農業一本で独立するケースはまれ。農業法人へ就職する、自給的な農業とやりたい仕事を組み合わせる、都会から移住して小さな農業から始める……最初のステップはさまざまで、どんな形であれ農業をしたいという思いを応援するのが信条だ。

■ 中間的就労支援（就労訓練） 各年利用者数



身一つで移住、地域と連携

ソーシャルファームは地域との信頼関係がなければ成り立たない。高橋さんは2017年、昔ながらの地縁関係が色濃く残る地区に古民家を借りて事務所とし、自らも仙台の家を引き払い移住した。「住んでしまったことで、『こいつ本気だな』って周りのおじいちゃんおばあちゃんたちも感じてくれたのかも」。農業をしたいと話すと、農地を貸してくれるだけでなく、畝の立て方や肥料の入れ方を教えたり、トラクターを出して耕したりと全面的に協力してくれたという。引きこ

もりの若者らにも気さくに話しかけ、一緒になって畑で働く。「誰が障がいがあるかないか分からない、ごちゃまぜ。それがソーシャルファームです」と高橋さんはうれしそうに語る。

石巻地域を中心にさまざまな支援団体とつながりを持っていることで、同法人は「駆け込み寺」的存在にもなる。生活困窮者や仕事を失った人が一時的に滞り、畑仕事をしたり、ご近所さんの庭の草むしりをして感謝されたりする。社会で役に立つ経験は自信になり、生活を立て直す意欲を生む。「支援者という立場ではできない支援が、地域コミュニティならできる。ありがたいです」と高橋さんは言う。

持続性 事業多角化進め安定雇用

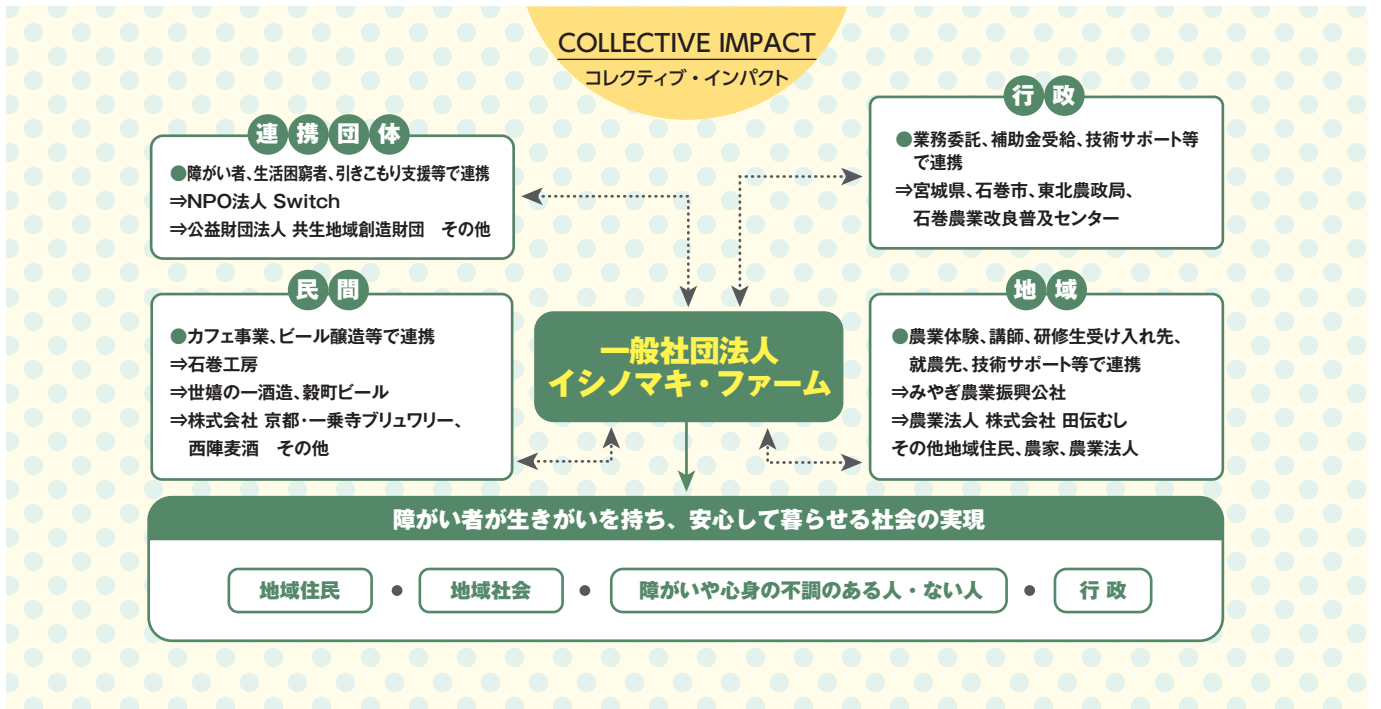
ホップで多角的に事業を実現

ホップ栽培と関連事業の部門は、スタッフのアイデアと機動力でさまざまな事業を生み出している。収穫したホップは岩手県の会社に醸造を委託し、2017年「巻風エール」として売り出した。クラフトビールブームに乗って京都や仙台の醸造所からもホップの引き合いがあり、好調だ。2020年、巻風エールの生ビールや自社農園の野菜を使った料理を提供するカフェをオープン、さらにアイスクリームなどの6次化商品も開発した。コロナ禍の現在は小規模のみでの開催だが、ホップ収穫体験イベントも計画・実施している。

2022年には石巻で自社醸造を開始するめどがついた。地元産ホップのビールができれば、飲食店や食品加工会社とのコラボも提案できる。さらに「農園で作るサツマイモを干し芋に加工しよう。とびっきりおいしく作って海外にも販売したい」と夢は広がる。



ファーム内で実ったホップ



スタッフが主体的に活動する

農業を切り口にさまざまなプロジェクトを動かしているが、これらはほとんどスタッフがアイデアを練り、工夫と努力で事業化にこぎつけたという。「代表である私は、何かあった時に責任を取るだけ」と、高橋さんは飄々としている。「一人一人が課題意識をもち、目標を実現させるのが持続可能な法人運営の基本じゃないかな」。事業が広がり収益が増えれば、利用者を日当ではなく正式に雇用できる。目下最大の目標は安定的な雇用を生み出すことだ。震災前と異なる魅力が生まれつつある石巻で、イシノマキ・ファームは他団体とも協働を進めながら活動の幅を広げていく。



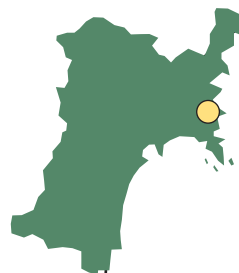
高さ5mにもなるホップ



2017年に売り出されたビール「巻風エール」



2020年にオープンした「I-HOP CAFE (アイ・ホップ カフェ)」



本事業例の問い合わせ先

一般社団法人 イシノマキ・ファーム

宮城県石巻市北上町女川字泉沢13
(石巻市農業担い手センター)

E-mail : info@ishinomaki-farm.org

HP : <https://www.ishinomaki-farm.com>

ソーシャルファームの概念に基づき、農業を通して、多様な人々の「はたらく」と「くらす」をサポート。雇用の創出と共生できる社会を目指し活動している。